

音順	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
	傷寒論・金匱要略条文	読み および解説・その他
さー9	<p>三物黄芩湯 (千金方)</p> <p>婦人産後病脈証併治第二十一第10条 (金匱要略)</p> <p>「附方 千金三物黄芩湯は婦人草蓐に在り。自ら発露し、風を得をたるを治す。四肢苦煩熱頭痛する者に小柴胡湯を与え、頭痛まず、但煩する者は、此の湯之を主る。」</p> <p>草蓐<small>そうじよく</small>に在り、但<small>ただ</small>、主<small>つかさど</small>る</p> <p>草蓐<small>そうじよく</small>は、出産のための寝床のこと。発露<small>はつろ</small>は、着物をはいで身体をあらわにすること。</p> <p>解説 産後間もない婦人が、熱がって自然に着物をはいでしまつて体をむき出しにして、そのために風邪を引いて、手足がほてつて苦しく、頭痛する者には小柴胡湯が主治するが、もし同じ様な状況で、熱があつて頭痛せず、ただ苦しがる者には、千金方に記載されている三物黄芩湯が主治するのである。</p> <p>産後の中風で、熱が血室に入ったのは小柴胡湯が主治する。</p> <p>三物黄芩湯 (千金方) は、下焦の血熱が甚だしく、脾陰を攻めると脾胃の主る手足がほてり苦しむ。故に表証の頭痛はない。</p> <p>三物黄芩湯は、黄芩で血室の熱を、苦参で下焦の熱を冷まし、地黄で下焦の陰気を補い、血熱を去る (参照 百合狐惑陰陽毒病第三第09条(金匱要略)) 陽病を現わした者には陰を養つて病を治す。</p> <p>三物黄芩湯は、手足煩熱する皮膚病に卓効を奏することがある。</p> <p>三物黄芩湯証</p> <p>新古方薬囊によれば「婦人産後、風邪を受け手足が不快にほてり堪え難きものに宜し。又それより移して男子にても手足悪くほてり、又は口中乾燥して煩すものに用ふべし。又は芯に熱ありて手足ほてりてむず痒きものに宜し。」と記されている。</p>	<p>黄芩 (苦平) 1g・苦参 (苦寒) 2g・乾地黄 (甘寒) 4g</p> <p>上の3味を水240mlを以つて煮て80mlとなし、滓を去り、2回に分けて温服する。</p>